

まえがき

1985年から1987年、私は初めてニューギニア高地のインボン族のアンブル村でフィールドワークを行った。あれから26年の歳月が過ぎた。

この26年の間に、アンブル村の人口は倍に増え、それに反比例するように村の外貌は見すばらしくなった。首都のポートモレスビーに高層建築のビルが建ち並び、近代的都市の姿をとっているのとは対照的だ。

首都にはマネーがあふれ、村ではマネーへの依存が進みながら枯渇してゆく。26年前、新しい時代への希望と野心に満ちていた若者達が、失意の内に沈んでゆく。才覚のある若者達はポートモレスビーや産業都市ラエで一旗揚げ、今や働き盛りのビジネスマンやロイヤーとなって活躍している。

かつて盛んだった伝統のマガリや豚屠りの祭りは衰え、今は、選挙がインボン社会の興奮のつぼとなっている。

祭りや戦さを差配していた伝統的ビッグマンに代わって、都市で成功を収め、マネーを動かしているビジネスマンが村社会を動かすようになった。

ものごとはなべて、村や伝統の枠組みから、都市や近代のイニシアティブへと移っていった。そこにおいて力を持つものがマネーである。

経済人類学者カール・ポランニーは、資本主義によって、社会の中に埋めこまれていた経済が自立すると言ったが、1990年からこの方、ニューギニア高地の村落社会では、社会が経済の中に埋めこまれるようになったのだ。これが、1989年のベルリンの壁の崩壊から始まり、2008年のリーマンショックによって終わりを告げたグローバル化の20年に、ニューギニア高地で進行した事態である。

村社会はトータル（全体的）な存在から、ローカル（局地的）な存在へと転落し、景観も内実も都市のスラム化してしまった。

2011年の雨季、インボン族の地は例年になく、冷い長雨に襲われた。サツマイモは育たず、救荒作物であるキャサバで、アンブルの村人達は凌いでいるが、それも尽きようとしている。標高1800メートルをこえる村々はキャサバも育たず、ゲパ（ホウレンソウのような緑色野菜）ですきっ腹を埋めている。

これもグローバル化に伴う気候変動の災厄である。

2012年2月

塩田 光喜